

文字形状と感情の関連性に関する研究

大谷 紀子研究室

0332183 橋本 共生

1. 研究背景と目的

1-1. 研究背景

近年インターネットの普及率は80%をこえ、より身近な存在として感じられるようになった。メールやチャット、ソーシャルネットワーキングサービスなど、インターネットは様々な使われ方をしており、情報伝達手段として文字が主に利用されている。しかし文字のみでの情報伝達だけでは言葉に込められた感情を伝えることは難しい。既存の文字に関する研究は多々あるが、文字をデザイン的な観点から見たものが多く、感情との関わりで研究されたものは少ない。顔文字や文字の装飾といった感情表現に幅を持たせる手法もあるが、個人の感覚で行われているものである。石原・熊坂[1]によれば、フォントが何らかのイメージ伝達することは確認されている。

1-2. 研究目的

文字の形状と感情の関係性を明らかにすることを目的とする。文字を構成する要素としては形状、色、大きさなどが挙げられるが、本研究では同一サイズの文字の形状に関する特徴に着目した。

2. 調査内容

武蔵工業大学の学生156人への質問紙調査を行った。内容は大きく2種類にわけられる。まず調査1では文字に関する形状と、文字から読み取ることのできる感情についてのアンケート調査である。形状の項目は先行研究[2]で分類された19種類を、感情についてはPlutchikの感情モデルを参考にした8種類を用いた。形状に関する質問では

前述した19種類の中で当てはまるもの全ての回答を求め、感情に関しては8種類について「まったく感じない」から「とても感じる」までの5件法を用いた。次に調査2では感情について、「その感情を最も表していると感じる文字」と「2番目に表していると感じる文字」の2つを15種類の文字群から選択させた。感情には前述の8種類を、文字群は無作為に選んだ15種類のフォントを用意し、使用した。また、選択理由についても自由記述で回答を求めた。調査2では、人が自分の感情を表現したいときに、文字を選択する要因を読み取ることを目的とした。

3. 調査結果

調査1の結果として各感情と相関のあった文字形状を以下に挙げる。

・喜び

正の相関：丸っこい、骨太、広がった

負の相関：スマート、シャープ、とがった

・驚き

正の相関：立体的、骨太、安定

負の相関：不安定、とがった

・憧れ

正の相関：骨太

負の相関：なし

・怒り

正の相関：凝った、とがった、筆文

負の相関：丸っこい、ふわふわ

・警戒

正の相関：凝った、とがった、筆文

負の相関：丸っこい

・ 悲しみ

正の相関：凝った、とがった、筆文

負の相関：立体的、丸っこい、骨太、広がった

・ 恐れ

正の相関：凝った、とがった、筆文

負の相関：丸っこい、骨太

・ 憎しみ

正の相関：凝った、とがった、筆文

負の相関：丸っこい

調査2の結果から、文字の選択理由として多かったものを表1に挙げる。

表1：調査結果

	選択理由
喜び	文字の丸さ 文字の太さ 文字のかわいらしさ
驚き	文字の太さ 文字の大きさ
憧れ	ぼんやりした文字 文字のかわいらしさ 文字の綺麗さ
怒り	文字の細さ 文字の間隔の狭さ 文字の雑さ
警戒	文字の太さ 文字の大きさ 癖のなさ
悲しみ	文字の細さ 筆文 文字の間隔の広さ
恐れ	文字の細さ 不安定 文字の小ささ
憎しみ	文字の汚さ 文字の細さ 文字の雑さ

4. 考察

4-1. 形状と感情に相関関係

全ての感情に対し、正の相関がある文字形状がみつけれられた。また、「憧れ」を除く全ての感情に、負の相関がある文字形状がみつけれられた。「怒り」

「警戒」「悲しみ」「恐れ」「憎しみ」の5種については、正の相関、負の相関ともにほぼ同様の結果になっており、いずれもマイナスイメージを想起させる感情である。すなわち、マイナスの感情という広い意味でのイメージを表現したい場合には調査1の結果は有効であるが、「怒り」や「悲しみ」といった細かい感情までは伝えきれないといえる。

「憧れ」という感情については、語感からイメージがわきにくいという意見もあり、質問内容をより具体的にするなど、質問紙の改善も必要である。

調査2の結果でも、「警戒」と「憧れ」を除く感情について、文字選択の偏りに特徴が見ることができた。選択理由についても文字の太さや細さなど、共通の内容をみつけることができた。感情を表現したいときの文字選択要因と形状の間で相関関係が示唆されたといえる。

4-2. 調査1の結果の妥当性

調査1の結果と調査2の結果で合致する形状の特徴が多い。「喜び」「悲しみ」の結果では調査1の相関関係と調査2の選択理由がほぼ合致しており、妥当な結果といえる。「驚き」「恐れ」では「文字の太さ」に関する特徴で結果が合致している。

5. 研究のまとめ

感情と文字形状の関係の傾向が示された。またマイナスイメージを想起させる特徴については共通性があることも明らかになった。今後の課題として、調査2の結果から得られた「文字のかわいらしさ」や「雑さ」といった回答者の主観的な選択理由と具体的な文字の特徴の関係性について検証する必要がある。

参考文献

[1] 石原次郎 / 熊坂亮 “フォントの違いによるイメージ伝達効果” 独語独文学研究年報 29(2002)
[2] 岩田佳子 / 岩田満 / 田野俊一 “フォント形状・感情・感性の相互依存関係の分析と関連ルール抽出の試み” 感性工学研究論文集 Vol3.No1 pp.7-16(2003)